

2016 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 14:50～15:50 60分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きを使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

圖 編

(按出版年份由前至後編列)

1. 2010年1月1日出版或發行的雜誌或期刊(按出版時間由前至後編列)

2. 2010年1月1日出版或發行的圖書(按出版時間由前至後編列)

— 一次の文章を読んで、後の間に答えなさい。(50点)

「独住ほどおもしろきはなし。長嘯隱士の曰く、客は半日の閑を得れば、あるじは半日の閑をうしなふと」——と、芭蕉は『嵯峨日記』の中に書き留めている。よくよく考えてみれば、これはしかし奇妙な言葉ではある。客あしらいの鬱陶しさ、面倒臭さで、あるじの閑が失われる。これはわかるが、しかしそんな中、客の方はあるじの側の事情は我関せずとばかり、勝手に自分なりの閑を得ているというのである。それなら、客であるというのはまことに得なことではないか。

(1) 閑のジャマとなる客などには来てほしくない、独居がいちばんと、字面のうえでは芭蕉はそう言っているかのごとくである。だがそれは、日常の立ち居のいちいちに人懐かしさ、人恋しさが稀薄に行き渡った独居の充足と言うべきものであり、他者の訪いを厭う寒々とした孤立の礼賛ではないはずだ。もし、対座していて閑を心行くまで楽しめるのは客の方で、そっちの方が得だと思ふなら、現実の人間関係をとりあえず括弧の中に入れて、いっそ自分自身、トウトツにあるじの役を降り、客の役柄に移行してしまつたらどうだろう。

ちなみに、落柿舎主人去來の句の一つに、「岩鼻やここにもひとり月の客」がある。『去來抄』には、「先師上洛の時、去來曰く、酒堂は此句を月の猿と申し侍れど、予は客勝りなんと申す。いか侍るや。先師曰く、猿とは何事ぞ。汝、此句をいかにおもひて作せるや。去來曰く、明月に乘じ山野吟歩し侍るに、岩頭又一人の騷客を見付けたると申す。先師曰く、ここにもひとり月の客と、己と名乗り出でたらんこそ、幾ばくの風流ならん。ただ自称の句となすべし」とある。視線のぬしにとどまりつつ、その向ける先に月見の風流人を見ることよりも、自分自身でいきなり「月の客」となってしまうことの方が、よほど深い興趣がある。芭蕉は説いたのだ。

『嵯峨日記』の先ほどの引用に先立つ部分も見ておこう。

廿二日、朝の間雨降。けふは人もなくさびしきままにむだ書してあそぶ。其ことは、「喪に居る者は悲をあるじとし、酒

を飲むものは樂あるじとす。「さびしきなくばうからまし」と西上人のよみ侍るは、さびしきがあるじなるべし。

いったい誰があるじなのか。一方に「私」がおり、他方に「私」自身の悲しみ、樂しみ、淋しきがあるのだが、そのときあるじは「私」ではなく、悲しみ、樂しみ、淋しきの方だといふのである。もつともこれは元來『莊子』由來の命題で、それを芭蕉が引用しているだけのことなのだ。

それにしても、そのとき「私」とは、あるじでなければいったい何なのか。あるじのもてなしを受ける客にほかなるまい。様々な「情」は自分のうちにあるのではない。それ自体がものとして外に在り、それが「私」があるじする、すなわち饗設けしてくれるのだと芭蕉は言う。

subject と object に「主觀」「客觀」という訳語を当てた明治の知識人の發明には、なかなか味わい深いものがある。「客は半日の閑を得れば、あるじは半日の閑をうしなふ」といった使われかたの記憶を内に畳みこんだ「主」「客」の字が、カント哲學を踏まえた二元論を日本語へ同化しようとする試みに際して、いささか強引に喚び起こされてきた。しかし、独居して閑を愉しんでいる「主体」自身がすでに「客」だとすれば、カント的三元論には最初から亀裂が入っていることになる。

服部土芳の『三冊子』が伝える、「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」という芭蕉の有名な言葉がある。「私意を離れよといふことなり」という説明が続くが、これは畢竟、松をあるじに、我を客にといい教えにほかなるまい。松も竹も、そちらの方が本来は「客體」であることを前提としたうえで、主客逆轉の作法が語られているということだ。土芳はこう続けている。

習へといふは、物に入りて、その微の顕れて情感するや、句と成るところなり。たとへば物あらはに言ひいでても、その物より自然に出づる情にあらざれば、物と我二つになりて、その情誠にいたらず。私意のなす作意なり。

「習う」は元來、「做う」であろう。私心を棄て、謙虚な模倣によって「物に入」るとき、「物」から「情」が発する。

(3)

西欧哲学は、「主観」と「客観」の截然とした隔離に(4)が生じるとき、それを例外的な事態として、時にはいつそ禍々しい病として、感得せざるをえないらしい。たとえばサルトルの『嘔吐』の主人公アントワーヌ・ロカンタンはそこに「吐き気」を感じた。

土曜日、子供たちが水切り遊びをしていて、私も彼らと同じように小石を海に投げようとしていた。その瞬間、私が動作を止め、石を落とし、立ち去った。きつと、よほど取り乱した様子だったに違いない、というのも子供が私の背後で笑っていたからだ。

外からはサクラン⁽⁵⁾と見えたかもしれないが、ことが起きたのは自分の内面においてはではない、とロカンタンは強調する。自分の頭がおかしくなったわけではない、そう確信しているのだと彼は言う。「これらの変化すべては、客体^{オブジェ}に関わりがあるのだ」と。では、その客体とはいったいどのようなものだったのか。「その小石は平たくて、片面全体は乾いており、もう一方の面は濡れて泥だらけだった。私は手が汚れないように、指をてのひらにばいばいぎゅっと開き、石のへりを掴んでいた」。

この石の、表側と裏側の鋭いコントラストには、たしかに何やら不穏な気配が、あるいはいつそ恐怖と言ってもいいような何かが漲^{みなぎ}っている。平たい石は恐らく、浜辺の濡れた砂地の表面に嵌^はまりこんでいたのだろう。外気にさらされてきた表側は乾いているが、地面に密着していた裏側は泥にまみれている。それは「空気性」と「大地性」という、相異なる二つの相を同時に持つような特殊な客体だった。それを把持するロカンタンの手の形がきわめて徴候的だ。彼はそのどちらの面にも触れまいとして、いつはいに開いた指の腹で、厭^{いや}々ながらのようにへりを掴む。客体と親密な関係に入る⁽⁶⁾ことがはなから忌避されている。

『嘔吐』は、この種のソウワ⁽⁷⁾を幾つか積み上げつつ、その最終的なクライマックスにあの「マロニエの根」との出会いを置いて、客体に何かが起こったとロカンタンが言う、その謎の核心を明かしてみせる。何のことはない、ロカンタンに恐怖と吐き気を催させたのは「存在^{ユトクステン}」だったというのがその答えである。「意味」を欠いた「存在」——「本質」に先立って在る(8)

の「存在」の不意のなまなましい露出が彼を追いつめたのだというのが、推理小説の結末にも似たサルトルの種明かしということになる。

非常に見事に書かれたこのサルトルの最初の長篇小説——彼が完成しえた実質上唯一の長篇小説——は、その喜劇的な側面においてもブリリアントだというのがわたしの年来の考えである。へ A へ 客たるべきもの（客体）が突然あるじと化して立ちほだかり、人間主体はと言えばヒューマンイズムの威信も尊厳もことごとく失い、ただその専横な跳梁に追従するほかない。これは実は、俳諧的な滑稽味としても記述しうる一状態のはずである。へ B へ ところがここではそれが、そのグロテスクぶりが誇張された異形の観念イメージとして、主体を猛々しく脅かしかかる。この脅迫劇に欠如しているものは、主と客との、もてなし、またもてなされるという親密な交流、あるいは交際である。

「存在」がサルトルの主人公を圧倒するのは、それが「意味」とも「本質」とも無縁ななまの何かとして露出するからである。しかし、この出来事が恐怖や吐き気を惹起せずにいないというのは、日常的な生活世界は「意味」や「本質」のシステムに従って円満に分節化されているという通念がもととあつて、持続的な生の安穩を保証しているその通念がいきなり崩壊するからこそこのことであろう。そして、この通念自体、実はきわめて西欧的な精神の姿勢なのである。へ C へ ロカントンは、チャップリンよりもキートンに似た喜劇的英雄として、狂気の概念を拒みつつける狂人を演じ、そのコウチョコクした頑なさによってわたしたちの笑いを誘う。ところが、わたしたちの文化的伝統は、それを「風狂」と名づけることをためらわない。

へ D へ 「月の客」を自称すべしと芭蕉から窺められた去来は、「先師の意をもつて見れば、少し狂者の感もあるにや。退いて考ふるに、自称の句となして見れば、狂者の様もうかみて、はじめの句の趣向にまされること十倍せり」と言い、「誠に作者そのことを知らざりけり」と付け加えている。ここでの師と弟子とのやり取りそれ自体が、主客間の響応関係の実り豊かな一範例にほかならないことは言うまでもない。

「物に入る」こと。たとえば、それは林檎やサント・ヴィクトワールを前にしたセザンヌがそこに到達しようとして倦まず弛まず試みつづけた境地の謂いでもあろう。「色彩はわれわれの脳と世界とが接合する場所である」と彼は言ったが、これはク

レーが好んで引用した言葉でもある。主観と客観との接合と言つてもよかつたはずだ。セザンヌの画布は、これもまた、客体があるじとなり、主体が客と化すという逆転劇が繰り広げられる舞台でもあつた。

ただし、セザンヌにとって、色彩と空白による奥行き追求は、頑固な耐忍によつて持ちこたえなければならぬ根気の要る労働だったのに対して、(11)における「物」への参入は、しばしば一瞬の閃光せんこうのような出来事である。『三冊子』には、

「また、句づくりに師のことばあり。物の見えたる光、いまだ心に消えざるうちに言ひとむべし」という、これもまた有名な言葉がある。「物の見えたる光」は、うかうかしている心は何の痕跡こんせきも残さないままたちどころに蒸発してしまふ、それほどに
はかないものであり、(12)とは畢竟、それを手早く掴み取り、言葉による堅固の造型を施す手練のわざの謂いなのだ。

(松浦寿輝「黄昏客思」『文学界』二〇一二年八月号)による)

注 長嘯隠士……江戸初期の歌人(二五六九〜一六四九)。

落柿舎……芭蕉の門弟・向井去来の別荘。ここで芭蕉は『嵯

峨日記』を書いた。

先師……芭蕉のこと。

酒堂……芭蕉の門弟(生年不詳〜一七三七)。

客勝りなん……〔猿〕より)「客」とするほうがよい。

騷客……詩人、風流人。

自称の句……自分のことを語つ

た句。西上人……西行。

服部土芳……芭蕉の門弟(一六五七〜一七三〇)。

畢竟……けつきよく。

サルトル……フランスの哲学者(一九〇五〜一九八〇)。

「マロニエの根」……ロカントタンに吐き気を感じさせた客体。

キートン……アメリカの喜劇俳優(一八九五〜一九六六)。

セザンヌ……フランスの画家(一八三九〜一九〇六)。

サント・ヴィクトワール……南フランスの山。

クレー……スイスの画家(一八七九〜一九四六)。

〔問一〕 傍線(1)(2)(5)(7)(10)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 空欄(3)に入れるのもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A その「情」があるじとなり、「我」とともに、ただ閑の風流を楽しめばよいというわけだ。
- B その「我」があるじとなり、「物」は客としてただ閑の風流を楽しめばよいというわけだ。
- C その「物」があるじとなり、「月」は客としてただ閑の風流を楽しめばよいというわけだ。
- D その「情」があるじとなり、「我」は客としてただ閑の風流を楽しめばよいというわけだ。
- E その「物」があるじとなり、「我」とともに、ただ閑の風流を楽しめばよいというわけだ。

〔問三〕 空欄(4)(8)に入れるのもつとも適当なものをそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。

- (4) A 誤解 B 混濁 C 共鳴 D 曲折 E 矛盾
- (8) A 仮象 B 虚構 C 普遍 D 偶然 E 裸形

〔問四〕 傍線(6)「客体と親密な関係に入ること」と同義の九字の語句を、他の著作からの引用部分以外の、本文中から抜き出して答えなさい。(句読点、かつこも一字に数える)

〔問五〕 傍線(9)「人間主体はと言えばヒューマニズムの威信も尊厳もことごとく失い、ただその専横な跳梁に追従するほかない。」とあるが、その事態の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 人道主義により根拠づけられ、「物」との濃密な交接の中に確立されてきた人間の主体性が、奇怪な「物」の顕現によって脅かされること。

B 人間中心の意味と本質を付与することで「物」を威圧的に支配してきた人間が、「物」の暴力的な反逆により存在する意味を奪われること。

C 世界が主体から隔離された客体としてみずから対峙たいじしていることを洞察した人間主体が、その厳然たる二元性の事実

D 意味が認められない「物」の不意の顕現によって世界の秩序がゆらぐ中、それにただ安住してきた人間主体が崩壊の危機にさらされること。

E 意味と本質を付与されて調和的に成立している世界を前にした人間が、心の深みにおいて人間内部の不気味な真相の認識を強いられること。

〔問六〕 空欄(11)(12)には同じ語が入る。そこに入れるのもっとも適当な二字の語を、本文中から探し出して答えなさい。

〔問七〕 本文のへ A ヴィへ D ヴに「だが、それはむろんグロテスクすれすれの滑稽味である。」を入れるとすれば、どこが適当か。もっとも適当な箇所を符号で答えなさい。

〔問八〕 次の文ア、カのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 芭蕉が去来に示唆したことは、あるじと客が直ちに入れ替わる自らの情景をとらえ記すという、日常的視点を超える境地だった。

イ 日本の文化的伝統の中で、主体と客体が自在に逆転するという発想は、風流人といわれる人々にあつては自明なものであった。

ウ 西欧人たるセザンヌは主客の二元的対立に徹した果てに、見るものと見られるものの逆転の境域に達し、「物」の内奥に参入した。

エ ロカントンの心中に思いがけず浮上したのは「物」の隠れた本質を示す「存在」であり、彼はこの考察によって平静な心を失った。

オ 芭蕉が説いたのは、いかなる先入観も排除して「物」をとらえ、その奥深い実相を一挙に感受して、それを言語化する方法だった。

カ 西欧の伝統によれば、「物」はその観念やイメージを支配し、人はそうした「物」を体系化することによって生活世界を構成してきた。

二 次の文章は一九九九年に行われた講演をもとに編集されたものである。以下の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

懐徳堂は、一七二六年に正式に創立されて、百年以上続いた学問所です。大坂地域の商人たちに対して開かれていた、官許をえている学校です。商人たちに対して開かれている、というのは、武士が講義を聞きに来て、商人たちが同じ資格で勉強ができる場所だった、という意味です。

なにを勉強したかという点、もちろん儒学、この時代ですから朱子学ですが、やはりいたい商人の出である懐徳堂の教師たちは、おもに伊藤仁斎の影響下にあつて、その中心的なテキストは孟子もうしでした。ナジタが、最初の学主、つまり懐徳堂の校長である三宅石庵による最初の講義を要約しています。それを、私がかれとの往復書簡でも引用しましたが、そのなかで、とくに強く私が関心を引かれたのは次のようなところです。

石庵は「仁」ということを《人間の寛容さ、同情、慈悲心の基礎》ととらえました。ここでひとつ、つけ加えておきたいのですが、子供の教育について書いた『エミール』で、ジャン＝ジャック・ルソーは想像力ということを、他人の痛み、苦しみを感ずることができる唯一の能力、と書いていました。石庵の「仁」の定義を、フランスではほぼ同じ頃に生きたルソーのいう *imagination* とかさねて考えてみることに意味があると思います。また、ここに『源氏物語』を勉強している学生さんがいられるなら、徳川期に儒学と対立して興隆した国学に、『源氏物語』の根本的な思想として「物ノアハレ」を大きく評価する態度があったことを思い出してください。儒学者の石庵も「物ノアハレ」を大切に考えたのです。ナジタの言い方ですと、孟子を媒介にして、花が美しいとか秋風が身にしむとかいう「物ノアハレ」を知る受動的な能力を、同情という、他人の苦しみを共感する能動的な能力とつなぎました。そして《物ノアハレヲ知ルガ仁ナリ》といっているのです。

そして「仁」という根本的な徳、つまり英語の *virtue* に連なるものとしての「義」を定義します。それは、《精確であろうとし、それゆえ公正で原則に基づくものであり、またそれゆえ恣意を排そうとする精神的な能力に関係している》と考えていた、とナジタは要約しています。英語の原文ですと、ナジタは「仁」を *benevolence*、「義」を *justice, righteousness*、そして次に

いう「利」を profit と表現しています。続いて石庵は、商人のもとめる「利」はそこから、「義」にもとづく行為から生み出される、やはり道徳的なものと講義した、ということです。

さて、私は、四十年以上前、経済学をまったく勉強しないでいい文学部の学生だったにもかかわらず、大塚久雄によるマックス・ウェーバーの翻訳や研究を読んできました。いまでもこの懷徳堂の思想家たちに切実な関心を持っています。そしてそれには個人的な理由があるのです。さきに行ったナジタさんとの往復書簡にも書いたのですが、私が子供の頃に死んだ父親は、地方の小さな商人でした。この父が亡くなる前の一年、毎晩酒を飲んで、自分の前に息子の私を正座させて、商人としてすごした人生はつまらないものだった、人の生き方として間違いであった、と話し続けたのです。そして、お前は学問をするように、ともいったのでした。

あのバブルの時期に、雑誌や新聞、テレビなどで、経済人たちの——といっても、じつに多様なタイプがあるわけですが——文章を読んだり、話を聞いたりするたびに、私は自分の、志をえなかつた小商人の父親を思い出して、あの人はこうじゃなかつたな、と思うことがあつたのです。そして、もし父親が、⁽¹⁾三宅石庵の、さきの開講の言葉を教わっていたとしたら、どんなに勇気をえただろうか、とも思つたりしたのでした。

さて、セン教授は、貧困を定義されて、貧困とは生きるにあたいする自由が欠如していることだ、といわれています。良質の人生をおくる自由を奪うものとして、つまり貧困をもたらす大きい条件のひとつとして、コレラやマラリアの流行をセン教授があげられたこともあります。

そこで私が思い出すことは、十九世紀に入って農村の貧困がますます危機的なものとなつてゆくなかで、それを直接の動機に起つた大塩平八郎の乱の直後、懷徳堂のすぐそばに適塾が創設されたことです。そして緒方洪庵^{おがたこうあん}とその門下生たちが、大坂の民衆に大規模な貧困を押しつけるはずだつた病気を制圧するのに力があつた、ということですが、

やはりさきにのべたことですが、徳川期の政治体制そのものに、経済の危機の根本的な条件があるという、懷徳堂の直方や蟠桃^{ばんとう}の、あまり表面には押したてられなかつたけれども、明瞭に把握されていた認識を思いますと、結果として大坂を焼くことに

なった大塩平八郎の絶望的な叛乱も理解しえぬものではありません。

ここで民主主義という言葉を持ち出しますと、とうとうに感じられるかも知れません。しかし、民主主義の根本的な条件としての国民主権が、下から充実してくることがどうしても必要だと、適塾出身の福沢諭吉が近代化の始まりにおいて考えるにいたった、その背後には、十八世紀から十九世紀の初めの、とくに農村にあきらかだった経済的危機があったのも確かなことで、その実際的な認識は大塩平八郎のように過激な人から、懷徳堂の穏和な商人儒者にまで分けもたれていたのです。頼山陽を介して、懷徳堂の学者たちと、大塩との間につながりがあったといわれますが、それも不思議ではありません。かれらはみな、貧困という経済の大きい課題を、人間のモラリティーの課題にかさねて、経済的に考えつめざるをえなかった人たちなのです。

さて、私にあたえられた時間は少なくなりました。そこでひとつの側面に集中して話を閉じることになります。専門家のお考えはまた別かと思いますが、その時代を生きた者の実感では、近代化以後、日本人がもつとも危機的な貧困にみまわれたのは、敗戦前後からの数年でした。そしてこの貧困をもたらししたのは、ほかならぬ日本人のおこした戦争でした。それがアジアの民衆にもたらしたさらに大きい貧困のことも忘れるわけにはゆきません。

日本の国民として、もつとも大きい貧困へと戦争によって押しやられたのが、沖縄の民衆と広島、長崎の民衆だったと思います。生きるにあたいする自由が欠けていること、というセン教授の貧困の定義からいえば、それはまさにあきらかです。

さて、九月に東海村の核燃料加工会社JCOで起った事故は、奇蹟的といわれた繁栄から深い不況にいたるこの歳月の、日本経済の基本構造にひそんでいた貧困をあきらかにしました。たとえば現場の労働者が、かれらの生きるにあたいする自由をどのように犠牲にできたかを、それは一挙に示すものでした。またそれは、さらに大きい課題として、私らみなに日本の原子力発電の現在と将来について考えなおすことを呼びかけています。

私は、東海村でありうる事故の具体例について、最初に小説に書いた人間ではないかと思いますが——それは一九七六年の『ピンチランナー調書』という小説です——、今年の『宙返り』という小説も、意図して原発の事故を起そうとするテロ・グループとして、ある信仰集団を描いています。小説家の(2)にすぎない、といわれることは承知で、私は次の世紀の最初

の四分の一に、この国で起りうる大きい原発事故のことを考えずにはいられません。

それが引き起すはずの、大規模な放射能障害による貧困を、日本人はよく生き延びることができのでしょうか？ われわれは現在、また近い将来の日本の経済的繁栄と、二十一世紀のはじめのある一日以降の、核爆発にもとづく貧困を引きくらべつつ(3) してみることをしなくていいものでしょうか？ その絶望的な貧困に苦しむ次の世代の日本人に対して、今日の日本人は、いや自分らの生きるにあたいする自由のために、核エネルギーはどうしても必要だと言いはることができのでしょうか？ それについて、広島、長崎で、半世紀をこえて放射能障害による貧困に苦しめられてきた老人たちはどういのでしょうか？

(大江健三郎『鎖国してはならない』による)

注 ナジタ……アメリカの日本研究者(一九三六～)。

セン教授……インド出身の経済学者(一九三三～)。

大塩平八郎……陽明学者(一七九三～一八三七)。

直方……草間直方、両替商であり懷徳堂の儒学者(一七五三～一八三二)。

蟠桃……山片蟠桃、両替商であり懷徳堂の儒学者(一七四八～一八二二)。

〔問一〕 傍線(1)「もし父親が、三宅石庵の、さきの開講の言葉を教わっていたとしたら、どんなに勇気をえただろうか、とも思ったりしたのでは」とあるが、それはなぜか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A バブル期に追求されたような利益とは異なり、義から生み出される利は道徳的なものであり、恥じる必要はないと理解できたであろうから。

B たとえ志を得なくても、仁を根底にした商売をすれば孟子の思想を実現していることになり、徳の高い生き方だと理解できたであろうから。

C たとえ小規模でも、綿密で手がたい商売をしていれば、人として間違った生き方ではなく、後悔する必要などないと理解できたであろうから。

D 学問とは知識ではなく道徳的实践であり、人間の寛容さ、同情、慈悲心を基礎に商売をすれば、人々を救済しようと理解できたであろうから。

E 仁という根本的徳を追求していれば、同じ学問所で商人も武士もなく学んだように、商売は決していやしい営為ではないと理解できたであろうから。

〔問二〕 空欄(2)(3)には同じ語句が入る。もっとも適当な語句を、本文中から探し出して答えなさい。

〔問三〕 懷徳堂と諸学派に関して、本文の内容と合致するものはどれか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 国学は懷徳堂と同様に、同情という共感能力を大きく評価していたため、他者の権利を尊重する民主主義の根本要件を準備した。

B 大塩平八郎も懷徳堂の商人儒者たちも、貧しさを単なる経済的問題とはとらえず、より根本的な観点から解決をはかろうとした。

C 懷徳堂の思想家たちは国学者たちとは異なり、江戸時代の身分制度に起因した、生きるにあたいする自由を奪う貧困に抗おうとした。

D 大塩平八郎は懷徳堂の儒者たちと同様に、幕府が農民から自由に生きる権利を剥奪することで貧困を強いているとの認識を有していた。

E 適塾と懷徳堂の倫理的であると同時に政治的な思想は、「義」をないがしろにする幕府の政策を否定し、国民主権の発想へと繋がる端緒となった。

〔問四〕 次の文ア～ウのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 原爆は、放射能障害によって被爆者から良質な人生を送る自由を奪うことが長きに及んだがゆえに、貧困を強いたといえる。

イ 日本軍は、アジア各地の人々の生活を破壊し、日本人に対してよりもさらに大きな被害をもたらしたがゆえに、貧困を強いたといえる。

ウ 東海村の事故は、企業の利益を優先する姿勢が、労働者に貧困を強いるのみならず、将来の日本に貧困をもたらしていることを暴露した。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

今は昔、甲斐国の相撲大井光遠は、ひきふとにいかめしく、力強く、足速く、みめ、ことがらより始めて、いみじかりし相撲なり。それが妹に、年二十六七ばかりなる女の、みめ、ことがら、けはひもよく、姿も細やかなるありけり。それは退きたる家に住みけるに、それが門に、人に追はれたる男の、刀を抜きて走り入りて、この女を質に取りて、腹に刀をさし当ててゐぬ。

人走り行きて兄人の光遠に、「姫君は質に取られ給ひぬ」と告げければ、光遠がいふやう、「その御許は、薩摩の氏長ばかりこそは質にとらめ」といひて、何となくてゐたれば、告げつる男、あやしと思ひて、立ち帰りて物より覗けば、九月ばかりの事なれば、薄色の衣一重に紅葉の袴を着て、口おほひしてゐたり。男は大きな男の恐ろしげなるが、大の刀を逆手に取りて腹にさし当てて、足をもて後ろより抱きてゐたり。

この姫君、左の手しては顔を塞ぎて泣く。右の手しては、前に矢筈の荒作りたるが、二三十ばかりあるを取りて、手ずさみに、節の本を指にて板敷に押し当ててにじれば、朽木の柔らかなるを押し砕くやうに砕くるを、この盗人目をつけて見るに、あさましくなりぬ。いみじからん兄人の主、金槌をもちて打ち砕くとも、かくはあらし。ゆゆしかりける力かな。このやうにては、只今のまに我は取り砕かれぬべし。無益なり、逃げなと思ひて、人目をはかりて飛び出でて逃げ走る時に、末に人ども走りあひて捕らへつ。縛りて光遠がもとへ具して行きぬ。

光遠、「いかに思ひて逃げつるぞ」と問へば、申すやう、「大きな矢筈の節を朽木なんどのやうに押し砕き給ひつるを、あさましと思ひて、恐ろしさに逃げ候ひつるなり」と申せば、光遠うち笑ひて、「いかなりとも、その御許はよも突かれじ。突かんとせん手を取りてかいねちて上さまへ突かば、肩の骨は上さまへ出でて、ねぢられなまし。」かしこくおのれが腕抜かれまし。宿世ありて御許はねぢざりけるなり。光遠だにも、おれをば手殺しに殺してん。腕をばねぢて腹、胸を踏まんに、おのれは生きてんや。それにかの御許の力は、光遠二人ばかり合はせたる力にておはするものを。さこそ細やかに女めかしくおはすれども、光遠が手戯れするに、捕らへたる腕を捕らへられぬれば、手ひろごりてゆるしつべきものを。あはれ男子にてあらましかば、あ

ふ敵^{かたき}なくてぞあらまし。口惜しく女にてある」といふを聞くに、この盗人死ぬ⁽⁶⁾心地す。

女と思ひて、いみじき質を取りたると思ひてあれども、その儀はなし。「おれをば殺す⁽⁷⁾ども、御許の死ぬべくはこそ殺さぬ。おれ死ぬ⁽⁸⁾けるに、かしこう疾く逃げて退きたるよ。大きな鹿の角を膝に当てて、小さき枯木の細きなんどを折るやうにあるものを」とて、追ひ放ちてやりけり。

〔宇治拾遺物語〕による)

注 相撲……「相撲人」「相撲取」の略。 ひきふと……背が低く、太くがっちりした様子。

薩摩の氏長……天下無双とたたえられた有名な相撲人。

矢筈……矢じりや矢羽根を取り付ける前の矢竹。 おれ……おまえ。

〔問一〕 傍線(1)「何となくてみたれば」の理由として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 仕えていた姫君が人質に取られてしまい、どうしたらいいかわからず、動けずにいたから。
- B 人質に取られたのは妹ではなく、妹に仕えている女性だとわかり、少し安心していたから。
- C 妹が二人いるが、人質になったのは細く見た目もいい方の妹だったので、不安だったから。
- D 妹は相撲人である自分の二人分の力があるので、何もする必要がないと思っていたから。
- E 相撲人の妹とは言っても男ほどの力はないので、助けるためのいい方法を考えていたから。

〔問二〕 傍線(2)(5)の解釈として、もつとも適当なものをそれぞれA～Dの中から選び、符号で答えなさい。

(2) 「無益なり」

- | | |
|---|-------------|
| A | 邪魔になりそうなことだ |
| B | かわいそうなことだ |
| C | 役に立たないことだ |
| D | つまらないことだ |

(5) 「かしこく」

- | | |
|---|--------|
| A | 恐れ多く |
| B | 間違いなく |
| C | 利口そうに |
| D | もつたいなく |

〔問三〕 傍線(3)「いかに思ひて逃げつるぞ」に対する答えとして、もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 人質の女がほかの男の腹や胸を踏もうとするのを見てしまい恐ろしくなったから。
- B 人質の女が金槌をつかい盗人の手を砕こうとしていたので、恐ろしくなったから。
- C 人質の女が竹の節を腐った木のように指でつぶしたのを見て恐ろしくなったから。
- D 人質の女の腕をねじりあげたら、女の肩から骨が出てしまい恐ろしくなったから。
- E 人質の女を襲おうと思ったら、逆に腕を抜かれそうになり、恐ろしくなったから。

〔問四〕 傍線(4)「いかなりとも」の解釈として、もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A どういうわけなのかと考えたが
- B どうかと思う行動だといっても
- C どうでもいいことではあったが
- D どうにかしようとしたところで
- E もうどうにもならないとしても

〔問五〕 空欄(6)(7)(8)に入る語として、もつとも適当なものをA～Gの中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

- A べから
- B べかり
- C べく
- D べし
- E べき
- F べかる
- G べけれ

〔問六〕 次の文ア～オのうち、本文の内容と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア 光遠の妹は、賢かったので人質になっても素早く逃げる事ができた。
- イ 光遠の妹は、見た目は優美であるが実は荒々しい性格で有名であった。
- ウ 光遠の妹は、もし男だったら相手になる者がいないほど、怪力の女だった。
- エ 光遠の妹は、盗人をからかってやろうと思ひ、力の弱い女性を演じていた。
- オ 光遠の妹は、枯れた細い枝を折るように鹿の角を折れるくらい、力が強かった。

